

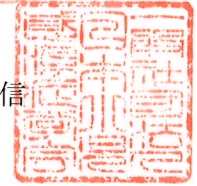
令和2年4月吉日

厚生労働大臣 加藤 勝信 殿

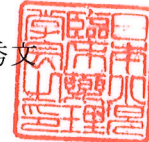
公益社団法人 日本小児科学会 会長 高橋 孝雄



一般社団法人 日本小児感染症学会 理事長 尾内 一信



日本小児臨床薬理学会 運営委員長 中村 秀文



公益社団法人 日本新生児成育医学会 理事長 中村 友彦



抗菌薬の安定供給に向けた小児科関連学会の提言

すでに感染症に関連の深い4学会（日本化学療法学会、日本感染症学会、日本臨床微生物学会、日本環境感染学会）から2019年8月30日に抗菌薬の安定供給に関する提言書が提出されていると存じますが、このたび日本小児科学会、日本小児感染症学会、日本小児臨床薬理学会、日本新生児成育医学会としてもその提言を補遺する提言を提出させていただきます。

2019年3月にセファゾリンという抗菌薬が1つの企業から供給困難となりましたが、同時期に細菌性髄膜炎診療ガイドラインでは小児領域の第一選択薬に明示されているパニペネム・ベタミプロンも同様な連絡を受けておりました。小児感染症に携わる医療機関は、これにより代用可能な他の抗菌薬も不足する状態を招き、多くの医療機関で適切な感染症の治療に問題が生じております。

「現在日本の感染症診療は、1つの企業の1つの薬剤が供給停止となれば、その影響が予想以上に拡大するような危うい状況に立たされており、この問題は、医療の問題を超えて、安全保障上の問題を呈しつつある」とする四学会の憂慮と同じ想いを共有しています。同時に、小児科領域では承認を取得している薬剤が成人領域と比較して極めて希少であるという問題点を孕んでいるという小児科特有の理由により、今回の突然の抗菌薬の供給困難により危機感を募らせています。

我々、小児感染症に関与する者は、強く抗菌薬の安定供給を希望しております。国および関係省庁に積極的な取り組みを行っていただくよう提言いたします。

参考資料として、日本小児感染症学会としても、臨床的に重要な抗菌薬をKey Drugとして選定し、大きな支障が生じないような抗菌薬の供給体制を構築する必要があると考えております。今回、国内で使用されている各種抗菌薬の中で、Key Drugの案を提案させていただきますので、ご確認いただけますと幸甚に存じます。

参考資料

・選定の基準

小児領域の抗菌薬の Key Drug は、4学会において選定した薬剤と同様、小児感染症の治療などに使用される代表的な薬剤として位置付け、他の抗菌薬と比較して安定供給が特に欠かせない薬剤として、選定いたしました。また、供給の状況や現場のニーズを考慮して、一部の薬剤に偏りが生じない配慮も行っています。なお、今回、対象薬は注射薬のみに限定し、経口抗菌薬は対象外としています。

・選定した薬剤名

4学会が選定した10薬剤のうち7薬剤（①～⑦）に、小児領域で必要な3薬剤（⑧、⑨、⑩）を加えた10品目の Key Drug を以下に列記いたします。

① アンピシリンナトリウム/スルバクタム

② タゾバクタム/ピペラシリン

③ セファゾリン

④ セフメタゾール

⑤ セフトリアキソン

⑥ メロペネム

⑦ バンコマイシン

⑧ アンピシリン

⑨ セフォタキシム

⑩ パニペネム・ベタミプロン

・4学会が選定した7薬剤（①～⑦）に3薬剤（⑧、⑨、⑩）を加えた選定根拠

上記、⑧、⑨、⑩は小児呼吸器感染症および髄膜炎などの重症感染症の第一選択薬の1つであるため。